

## 保育園・幼稚園の教育考①

長田安司

### 足元を見直せ！

認定こども園が法制化された。国の定めた認定基準を読んでいくと幼稚園は教育、保育園は託児といったような深層意識が感じられる。また、教育は幼稚園の専売特許のような言い方をする幼稚園関係者もあり、保育園関係者はそれに対抗して、保育園は養護と教育で教育もちゃんと行っているとの反論をしているようである。

こうした論争も結構だが、ひとつ目を覚まし冷静になって現実の保育状況を見つめ直すことが必要なのではないだろうか。

2002年12月に日本保育学会がとりまとめた「地域の実態研究委員会最終報告」は、横浜の保育所、横浜保育室、幼稚園の保育実態を報告している。一読をお勧めする。

特に印象的なものは、実態を正しく把握するために、昼間保育現場で働き夜間に保育専門学校で学んでいる学生に対してアンケート調査と、また幼稚園教諭への直接の聞き取り調査であった。

学生に対するアンケートでは

(1) 子どもにとって不利益な状況があるかどうかについて、不利益を感じた学生は幼稚園では81.1%、保育園が90.4%に上る。

- ・自由遊びが少なく、子どもがもつと遊びたがっていた。
- ・行事が多く、やることや覚えることが多い。
- ・遊具ばかりで遊んでいて、保育者の考えた遊びが少ない。
- ・子どもとのかかわりがとても薄い。
- ・鼓笛隊の練習中には先生の怒鳴り声ばかり聞こえる。そのとき子どもの顔は死んでいる。先生は自己満足している。

- ・とにかく、保育者に対して人数が多すぎる。
- ・部屋を追い出されたり無視されたりする子がいる。
- ・保育方針が定まっていない。

(2) の保育者の言動で気になることについては、幼稚園で51%、保育所で68.2%が問題であると指摘している。

・保育者の言葉遣いが命令型ばかりで子ども

もおびえている。

- ・おもちゃの食事中に吐いた子どもに對して「汚い」と言う場面を見た。
- ・子どもの前で「〇〇がむかつく」など平気でかけている。
- ・間違ったことをすると頭をぶつ。
- ・怒るときに子どもを突き飛ばす。

- ・子どもの対応に対して「この子はかわいくないから嫌」などと平気で言う。

幼稚園教諭からの回答からはこんな状況が伝えられている。

『課題が多くてやらせることがかりですごく強制的にやらせないといけない。きつい言い方の方が、子どもは怖がつてやるでしょう。他の先生の手前もある。「静かにしなさい!」「捨てちゃうよ!」「これあげないよ!」イライラしていたずらをしている子どもを急に部屋からつまみ出してしまったり、3歳児の子どもが「もうそついうことはしません」と泣きながら謝っている。』

保育や教育以前といった状況が語られており、その内容を読むと唾然とさせられる。

報告書の198ページにまとめられた考察には、「保育所では、待機時の解消、多様

なニーズへの対応などに追われ、そのしわ寄せが保育士や子供に及んでいる実態が読みとれた。」

「横浜保育室では「戸外で遊ぶ」散歩に連れて行く」といった意識が強く、散歩に行ってもうちは保育の質は確保されているといったような単純な見方が共通化していたことである。「利用者からの意見では「保育士がころころ変わる」「テレビ漬け」「衛生面での配慮に問題があり、集団感染が何度も起こった」など。

「私立幼稚園の宿命として、近隣幼稚園はすべてライバルであり、各園が特色を出し、競い合うことが、経営の効率化につながっているかもしれないが、実態はかえって幼児期の保育をゆがめてしまつ現実がある。「親のニーズに應える」という要求は、保育者に子どもにかかわる喜びよりも、緊張感や疲労感を増強させ、結果的には子どもたちの生活をゆがめていく。」とまとめられている。

保育園ではそうではないとは思いますが、幼稚園では、園を出発してから最後のバスが到着するまでの全体のバスの運行時間は2時間30分。バスに乗って走っている時間の

方が幼稚園で遊ぶ時間より長かったりして  
いる。

「こんな保育は我が園では行っていない！」と答える園長先生は多いのではないかとと思うが、この保育実態調査報告は、「実は日本の保育はこんなに問題が多いのですよ」という、ある意味の内部告発なのではないだろうか。

こんな現状が放置されているのは、施設長や保育者の資質に依るところが多いと思うが、そうした現実を作ってしまう真の原因として、幼稚園や保育園が「あまりにも不十分な基準」で運営されているからだと思う。(保育界2005.9.10参照)

教育論議も結構だ。保育園の努力が足りないから待機児が解消しないとか、法律で義務つけて家庭支援や親への教育、地域への取り組みを課すのは結構だ。その必要性も認める。しかしその前に、足元を見直すことの方が重要ではないだろうか。

(共励保育園理事長)

## 保育園・幼稚園の教育考②

長田安司

### 子供たちの社会性を

### 育成することが緊急の課題

文部科学省は第5回幼稚園教育専門部会(2006.6.30)において「幼稚園における教育内容の改善について」論点1、協同性を育てる指導の在り方について」を提示した。

「遊び集団や遊びの群れが持続性を持って、自分たちで活動を維持していくという力や自分たちでグループを作って活動していく能力が保育の中で非常に問われており、そのときに協同性とか協同するという能力がいかに幼稚園で育っているのかというのが非常に重要な意味を持っている。」と指摘している。

こうした改善が指示された背景には、不登校やいじめ、小一プロブレムなどの子供たちの社会性やコミュニケーション能力の不足が指摘されたからだと思う。しかし、問題は小学校や中学校の問題だけでは収まらなくなっており、すでに成人になって企業に就職するようになった人たちにも同じような問題が広がっていると聞く。

平成18年2月9日の毎日新聞には次のような記事が掲載された。

「困った若手社員・・・経産省異例の対策」  
『周囲と協調して働けない』『指示がないと動かない』『すぐ辞める』こんな困った若手社員対策に経済産業省が乗り出す。実行力や協調性など社会人の「基礎的能力」を育成するため、産業界と連携して大学での実践的なモデル事業を開発することを打ち出した。産業界の“悲鳴”に応え、異例の対策に動く。報告書では「家庭や地域などの教育力低下で、社会人に必要な能力が身につけていない人が増えている。」「経済産業省は社会のニーズを把握して人材教育に努める。』

記事を読んで、思わず笑ってしまった。一体、産学連携でどのようなモデル事業を開発しようというのか、大学にどのようなカリキュラムを組むというのか、私には理解できなかったからだ。

そもそも、ここで問題とされている「社会人の基礎的能力」などというものは人の基本に関わるもので、当研究会議事録において一部の委員が指摘しているとおり、基

本の基は家庭で育むものであり、ここが崩れているから学校での教育が成り立たない現状がある。「三つ子の魂百までも」や「鉄は熱い内に打て」という格言のごとく、乳幼児期が大切で、すでに生煮えになっている大学生にいくら国家予算の大枚を払っても、元がどうしようもないのでは効果など望むべくもない。

その昔、多くの人は会社で一人前に育て上げられた。今、企業はそうした社会を支える大切な教育的役割を捨て、成果や結果ばかりを追い求める制度に切り替えた。自分の会社で人材を育てられないからといって、それを国(経産省)に求めるのはあまりに虫が良すぎではないだろうか。

この経産省のプロジェクトは、程なく「大学では遅すぎる」から「高校や中学でもだめだ」「やはり、小さいうちに教育しなくてはならない」という議論に進み、家庭の在り方や親の教育力再生論議に舞い戻ってくることになるだろう。

しかし、こんな要望が産業界から出るということは、日本の若者の状況は相当崩れているということを示している。フリーターやニートを対象としているのではない。

きちんと入社試験をパスした人たちに新聞記事のような状況が蔓延しており、どの会社でも同じような悩みを持つようになったとは、いよいよ日本沈没だと感じる。2003年に「保育園のパラドックス」(毎日新聞 2003.2.26)で指摘した人材不足による日本の産業界の競争力の低下がすでに始まっていることを示している。

さて、国(経産省)は産業界からのニーズを受けて即座に対応を図るよう動き出すものと思われる。一方、その産業界は市場競争原理に基づき、グローバルイゼーションに対応すべく、女性の戦力化を進めている。こうした要望を受けて、既に国(厚労省)はエンゼルプラン、新エンゼルプラン、少子化対策基本法等により国民のニーズ(産業界のニーズ)である長時間労働を支える、「いつでも、どんな時でも預かれ」保育施策を推進してきた。

この施策によって、家庭は団らんを失い、親子の間わりはますます薄くなり、家庭は教育力を弱めてきた。つまり、社会人基礎力の根本となる、「人に対する信頼感」「協同意識を育む大切な核である家庭の役割」を国の施策自体によって弱めてきたのであ

る。

一方の施策を進めると家庭の教育力を弱める結果をもたらす。もう一方はその弱体化した家庭の教育力を復活させたい。産業界から出た二つの矛盾したニーズは、いったいどちらのニーズが優先されることになるのだろうか。

(共励保育園理事長)

## 保育園・幼稚園の教育考③

長田安司

### 子供の社会性を育てる基盤 人への信頼感

家庭機能の弱体化により、保育園・幼稚園において「問題をかかえた子」が増大している。0-1歳児の段階での養育に何らかの問題を感じる。そうした子供たちが3歳頃になると、活動が活発になり、様々な問題が吹き出てくる。幼稚園では、それが「3歳児崩壊」と呼ばれたり、保育園では「クラスが成り立たない」といった悲鳴のような言葉で説明される。

保育園や幼稚園に入ってきた子供たちが、友だちと仲良く集団生活を送ることができるようになるには、基盤となる「人への信頼感」が育っていないとほならない。そうでなければ、人と安心して関わることができなからだ。

この人に対する信頼感を育成するには、何よりも0-1歳児における母子関係が重要である。ここが崩れると、子供の心はいつも不安感や不信感に覆われるが、そうした

気持ちと表裏し、他人に攻撃的になったり、なかなか周囲の人たちとうまくやっていけない人間に育ってしまうことが多い。

赤ちゃんは三十五億年の進化の歴史を、胎内の十ヶ月でたどって生まれてくる。まさに神の業としか思えない。こうした誕生の神秘性を思うと、「愛着対象は母親に限定されない」などという意見には疑問を持っていた方が良くもされない。人間が頭で考えた社会制度などには限界があることを認識すべきではないだろうか。

親の庇護無しには生きていくこともできない状況から、やがて歩行やことばを獲得し、自分の世界を広げていく。雨後の竹の子のようによきよきと成長してくる「自我」は、その子のパッション（熱情・生きる力）の元である。

この自我の成長への対応は十分気をつけなといけな。ここがいい加減にされると心が生煮えになると世界精神保健学会副会長の渡辺久子先生は指摘する。扁桃体が十分育たず、ちよつとしたことでキレたり、意欲やパッションもやせ細ると最先端の脳

科学研究者も指摘している。

一人ひとりの子どもたち、そうした自我を、がそれぞれに持っているのだから、保育の仕事は極めて手のかかる、大変重要な仕事であるのだが、意外に世間はそのことを理解されていないようだ。

この時期、保育指針が示すように、特に「一人ひとり」への適切な対応が求められる。これが適切でないと、人を信頼する基盤のようなものを失い、心が穏やかでいらなくなる。友だちはいつも競争相手であり、自分の欲するモノを奪い合う敵であり、安心感を与えてくれる保育士や場所を確保するのに神経を張りつめなくてはならない状況に陥つたりする。社会的不適合を示す子供がクラスに多くなると、保育指針で示される「一人ひとりを大切に保育」などは不可能になる。

米国立児童保健発達研究所が03年に実施した過去最大規模の長期調査によると、「託児所や保育所で過剰な時間が長いほど、攻撃的になったり、問題行動を起こしやすい傾向が見られた。」と報告している。また同

年にミネソタ大学が発表した研究報告でも、「子供は保育所にいる間ストレスホルモンである cortisol の分泌が高まるということが証明されている。」(Newsweek 2005. 3. 16)と報告している。

だから、長時間の集団保育は、その問題性が指摘されるのであるが、こんな報告は権威ある米国の報告を待つまでもない。既に昭和50年に厚生科学研究報告は「長時間保育の研究」をまとめている。問題行動の出現率の調査においては、保育時間が長くなるに従って問題得点が高くなり、不安傾向、顕示性、攻撃性、社会性などで有意差が認められている。P・E・Tによる調査の結果からは、「現在の8時間保育が、既に幼児にかなりの負担を与えており、その後の1、2時間の延長を云々するより、現在の8時間保育そのものの検討がなされなければならぬ」「行動評定の結果からみて、子供の愛情欲求は十分満たされているとは考えられず、これ以上の長時間保育を子供に課することは避けなければならない」と結論づけている。この研究は厚生省「自身」が調査・編纂を行った物と伺っている。

保育の現状をみるかぎり、子どもたちの社会性の基本となる「人への信頼感」をグラつかせるような施策はかりが広がっている。こうした乳幼児期の集団における保育や教育の在り方が思春期における子供たちの問題とつながっているのだが、施策担当者にはそうした想像力が働かないらしい。保育所の最重要課題である「子供たちを健全に育てる保育」そのものについては、十分な配慮と人的な配置がされてきたのだろうか。

現在の国の基準はあまりにも低すぎる。(保育界2016参照)国が取り組むべき第一の改革は、五十年以上も放置されてきた保育士一人当たりの子供の数なのである。

(共励保育園理事 専務)

## 保育園・幼稚園の教育考④

長田安司

### 三・四・五歳の発達の違い

インソップの「牛とカエル」というお話がある。原っぱへ冒険に出かけたカエルの子供たちが、出会った牛の大きさに驚き、大急ぎで家に帰り、父親にその牛の大きかったことを説明すると、父親は己の威厳を示そうとして無理に息を吸いお腹を膨らませたのだが、あまりにも無理をしたためにお腹がパンと割れて死んでしまうという教訓じみた話である。

かつて、この話を三歳・四歳・五歳の子供たちに話し、その後『今のお話はどんなお話だった？聞かせてね』と頼み、子供たちがどのようなお話を返してくれるかを調査したことがある。返してくれた話の特徴をまとめると次のようなものであった。三歳児は「パン」という音や「膨らんだお父さんのお腹」の印象から連想が働き、フーセンにからんだ話に飛んでいってしまふ傾向が多くみられた。世界が自分を中心

に回っている三歳児である。イメージをきつかけに自分の感じたこと、思ったことへと話を展開させていってしまうのである。相手の話を聞いて、それに応えるような内容を返していく力はまだまだ十分ではない。

しかし、この連想する力は、一つの事柄を別な事柄へと関連づける力として働き、やがていろいろな概念を獲得するためにとても大切な役割を果たすようになる。この年齢における重要な発達の姿なのである。

四歳児は、いま聞いた話を、もう一度なぞるように最初から最後まで再話しようとする傾向が強かった。この時期、助詞や接続詞の使い方も含めて、日本語の決まりに沿った話し方を獲得していく。そうした言葉を使いたいという内的な欲求があるのだらう。また、保育園生活や遊びのルールなど、規則の意味が分かり始め、自分の意志でそのルールに従おうとする姿勢を見せる。規範意識が強くなるのも特徴である。そうした意識を基に、親、保育士、友達との社会的な関わりを深め、自分の考えや行動の判断基準を作っていく。

五歳児はどうだったらうか。五歳児に今聞いたお話は、どんなお話か話してみて」とお願いすると、『カエルのお父さん、バカ

じゃないの?』と返された。調査をしていた保育士も、この反応には「思わず笑ってしまった。」とのことであった。

五歳児はまるで、芋虫が蝶に変身するかのとき変化を遂げる。

『ルールを守ることが、直接的衝動の満足よりも大きな楽しみを、遊びが約束する。自らを意味の世界に従属させながら生きていくことを子供たちが求めている。決して外から強制されたわけでもなく、誰に命令されたわけでもなく、子供たちは自らの意志に基づきながら、自分自身を意味や価値の世界に従属させるようになる。』と、エリ・エス・ヴィゴツキーは指摘している。

三歳児に左右を教えることは非常に難しい。なぜなら向きが反対になると左右が逆になるからだ。しかし五歳にはこうした置き換えは可能になる。それまでの「鬼に捕まりにいつてしまう鬼(こつこ)」から、「最後まで生き残ろうとする鬼(こつこ)」に変わる。相手の気持ちや、物事の裏側に隠された意味までも理解するようになるのだ。

こうした発達の変化を脳科学ではどのように明らかにしてくれるのだろうか。毎日の体験が、子供たちの脳のネットワークを刻々と作りあげていく。使われない、必要

のないシナプスは淘汰され、子供たちの心や体を動かした実体験が新たなシナプス生みだし、より強い確かな脳のネットワークを構築していく。

こう思ったとき、乳幼児期の保育・教育の重要性を更に深く感じ、この仕事の大切さを改めて心に刻み込む。

幼児はそれぞれの年齢、発達段階にふさわしい形で、幼児なりに真剣な世界をもつて生きている。だから、その年齢に応じた遊びや学びを保育士は保障する必要がある。

都市化が進み、地域がなくなり、家庭の教育力が弱くなった現在、かつて子供たちが自然に獲得することができていた力は、そのままでは期待できにくくなっている。

だから、保育園では、こうした失われた部分を補い、体験できるように意図的に保育を仕組んでいく必要があると思う。

三歳の発達の上に四歳の発達があり、四歳の発達の上に五歳の発達がある。この発達の連続性を考えたとき、五歳を切り取り、小学校で教育しようとするときに大きな疑問を感じる。就学前の教育を「保育」と呼んでいる意味をもう一度、深く考える必要があるのではないだろうか。

(共励保育園理事長)

## 保育園・幼稚園の教育考⑤

長田安司

### 子供の社会性を育てる保育

「劇を通して学ぶ」という教育手法がある。

共励保育園では、運動会が終わると二月中旬までの二ヶ月半はゴッコ遊び・劇遊びを楽しむ期間を設けている。絵本や創作話などを題材にして子供たちと話しながら劇を作っていく。その劇遊びの中で、こんな事件が起きた。

劇中に一本橋を渡る場面が組み込まれており、グループ全員が一列になって渡らなければならない。そこで子供たちはジャンケンをして順番をきめるのだが、A君とB子ちゃんがジャンケンでもめ、劇が中断してしまった。

そこで保育士がそのトラブルの原因を聞く。『ジャンケンをもう一度して欲しいとお願いをしたけど、B子ちゃんが嫌だということだ！』とA君が訴える。つまりA君はB子ちゃんに負けたのだ。しかしA君は先頭になりたかつたので、もう一回ジャンケンをして欲しいとB子ちゃんに頼んだ。B子ちゃんが「嫌だ！」と言

ったためトラブルが起きたという訳だ。

保育士はA君の言い分をみんなに問うと、C君が「でもB子ちゃんはもう一回やってあげなかつたから悪いと思う」と発言。すると、ク

ラスの他の子が口々に「私もそう思う」「僕もそう思う」と言い始め、とうとう全員が「B子ちゃんがいけない」ということになってしまった。「お願いをされたのだからお願いは聞いてあげなくてはいけない。聞いてあげないB子ちゃんは悪い」というのだ。

日頃、「仲間に入れて」という言葉で子供たちは遊び集団の中に入っていくが、こうしたお願いを拒否することはいけないことだと保育士から伝えられている。「相手のことを考えないで意地悪をしたりすると、自分も仲間に入れてもらえないことも起る。だから、お願いをされたら喜んでそのお願いを聞いてあげましょう」と、保育士は子供たちに話している。

保育士はやりとりを通し、辛抱強く子供たちのいろいろな発言に耳を傾けていた。しばらくしてD君から『でも勝負は一回だけだよ』という意見が出ると、『あ、そうか！』と意見を交える子、『やっぱり、はじめに負けたA君が我慢すればいいと思う』『僕だって負けて我慢したよ』『私も！』と大勢が逆転し始めた。そうした意見を聞いていくうちに、A君は『僕に負けだよ』と言ってくれたのだった。

保育士はちよつとホツとして、D君の出した結論をもう一度なぞりながら、ジャンケンのルールの大切な点を伝え、そして「相手のお願

いを聞いてあげることが大切だけど、ジャンケンという勝負ではできないんだよ」「勝負では負けたら我慢するんだ」というルールや新しい価値観を子供たちが納得できるように話を加えていった。

ジャンケンが成立するには、いくつかの条件が必要である。①まず「グー・チョキ・パー」が手で作れなくてはならない。②次に「ジャンケンポン」というかけ声に合わせて、ポンというところで自分の「手」を出せなくてはならない。③加えてパーはグーに勝つがチョキに負けるという「三番目」のルールが理解できていなくてはならない。④最後に、ジャンケンはルールに従い勝負をし、その結果を受け入れるという民主的な気持ちで育つていなくてはならない。このどれを欠いてもジャンケンは成立しない。

四歳児は三歳児と違って、自分の「手」を「ジャンケンポン」というかけ声に合わせて出せるようになる。ところが、どの子も勝ちたい気持ちで一杯だ。これは自我の成長に表裏する気持ちである。自分が出した「手」が負けと分かる時、「手」を変えたりする。また、少し要領が分かると、「後出し」がでてくる。こうした一つ一つの出来事からトラブルが続出する。

そこで保育士はそのトラブルに一方的に結論を与えるのではなく、トラブルはどうして起きたのか、みんなが納得いくにはどうしたらよいかを、子供たちが理解できる言葉で返していき、導いていく。

ジャンケンひとつ取っても、四歳の子供たちがそのルールを獲得するには時間がかかる。しかし、こうしたできごとによって一つ一つ丁寧に対応することが、子供たち同士の民主的な関わりや楽しい友だち関係を作りあげるのに非常に重要な役割を果たす。こうした体験を重ねながら、五歳になると相手の気持ちや出来事の裏側の意味や価値が理解できるようになる。まさに子供たちは保育園で人としての基礎となる教育と体験を得ている。

第三者評価は、こうした「保育の質」や「教育の本質」にかかわる問題について評価するモノサシを持っていないのが誠に残念である。保育のサービスピッチ評価をしたところで、「保育の質」を評価できるものではない。

(共励保育園理事長)

## 保育園・幼稚園の教育考⑥

長田安司

### 子供の社会性を育てる保育

「5歳児の保育実践から」

『ぼくは王様になって、Rちゃんと結婚したい!』その年のゆり組の劇遊び活動は王様のひと言から始まった。動機が不純である。そんな個人的な願望を劇遊び発表会で要求してよいのだろうか? いや、良いのである。共励保育園の5歳児の劇遊び活動は、子供たちのやりたいことを舞台の上で表現するというのが基本コンセプトである。

別に、「ウオーター・ボーイズ」に強い影響を受け、どうしても「シンクロ」を舞台でやりたいと言う子がいた。この子を中心とした仲の良い10名ほどのメンバーはそろって保育士に要求を出す。そこで、劇のストーリーを決めていく過程で、忍者の役を受け持つことになり、忍者の修行で「シンクロ」をするということで納得した。

忍者とは全く対照的なお淑やかな女の子たちが同じクラスにいた。「リスになってハローモニカを吹きたい」という。夏のお泊まり保育の夕飯の後に、私はいつもリコー

ダーを吹いて曲名を当てるクイズを子供たちに出す。そのクイズに興味を持った子供がいて、自分たちが得意なハローモニカで「曲当てクイズ」をやりたいと申し出た。

子供たちのそれぞれの要望を受けながら、子供たちが語る物語を書き留め、時にはヒントを与え、また一緒に悩みながらイメージをふくらませ劇のストーリーを作りあげていく。既成の物語をそのまま演じるのは少し違ったアプローチを取る。

物語は次のように決まった。忍者たちの修行のためにお弁当を作ってくれている妹(Rちゃん)が王様に連れ去られ、忍者たちはお城に連れ戻しに行く。途中リスの出す曲当てクイズに正解し早道を教えてもらいお城に着くと、王様は自分が得意な「言葉ゲーム」に勝ったら妹を返してくれると言う。そこで忍者たちは王様チームに挑戦し、妹を取り戻すという物語だ。「言葉ゲーム」というのは、ひら仮名一文字が書かれているカードを組み合わせ、意味のある単語を作る競争である。例えば、「た」と「こ」で「たこ」というようにである。早く単語を10個並べたチームが勝者となり忍者の妹を獲得することができファイナー

レとなる。王様チームが勝てば、王様はRちゃんと結婚式が舞台の上でできる。忍者が勝てば無事妹を取り戻すことができるというわけだ。

劇は子供たちの要求を叶えながらクライマックスに進む。ウイリアムテル序曲に乗って言葉ゲームが始まり、子供たちは必死に文字を組み合わせ、用意されたボードに並べていく。やはり王様チームはこのゲームが得意らしく、どんどん単語が作られていく。一方忍者チームは、文字がよく読めない仲間もあり、なかなか進まないが、それでも大健闘である。「せみ」「おゆ」「ごめ」「むし」「へそ……」

王様チームが「うり」という言葉を最後に10個の単語を作り終えた。審判員は笛を吹いて王様チームの勝ちを宣言する。とたんに忍者チームは「くやしい!くやしい!」と舞台の上で地団駄を踏む。お母さんの見えてくれている舞台ではどうしても勝りたい勝負だったのである。

王様は夢が現実のものとなって、ちよつとポーっとしてしまったが、気を取り直し、花束を持ってRちゃんの前にひざまずき「お嫁さんになってください!」とプロポ

ーズをした。誰も「めでたし、めでたし!」と思った。その瞬間、忍者のリーダーが「うり」って何?と、10個目の単語「うり」にクレームをつけた。忍者のリーダーは「うり」を知らなかった。すると、他の忍者も「そんなのアリ?」「売りのウリ?」と追従した。意味の無い言葉は認められないという強い意思表示だ。それに対して大臣は自信を持って「漬け物」と応えた。会場は大爆笑。それでも忍者たちは納得しなかったので舞台は「うり論争」で大騒ぎとなってしまった。残念ながらこの論争のお陰で、王様の一世一代の望みであった舞台上の結婚式はすつ飛んでしまった。舞台は爆笑と混乱のうちに幕が下りた。

約2ヶ月半のこの活動を通して子供たちは「ルールを守ることが大きな楽しみを与えてくれる」ことを体験する。活動の中で起るトラブルが彼らの社会的な力を育てる。協同することの喜びを知る。個人の成長に集団が大きな意味を持つことは言うまでもない。

そして、子供たちの意欲的で主体的な取り組みを現実のものとするためには、小さな達成感と共にその年齢なりの力が蓄積さ

れていくことが重要である。思っているも  
伝えられない、ルールや説明されたことの  
意味が分からない、作りたくても作れない  
不器用な手では世界は広がらない。

国の礎となる子供たちを育てる保育園は、  
子供の成長・発達に見合った教育的活動を  
子供たちに保障することによって真の存在  
意義が認められようになる。経済・労働中  
心の現保育施策にはそのことが忘れられて  
いる。(完)

(共励保育園理事長)